

京都市多文化施策懇話会 2012年度（平成24年度）第1回会議摘録

日 時：2012年（平成24年）6月19日（火）午前9時30分～午前11時30分
場 所：京都市国際交流会館 第1・第2会議室
議 題：「外国籍市民等と地域交流 ～地域活動～」
出席者：京都市多文化施策懇話会 第2期委員 11人（欠席：姜直子委員）
京都市：星川副市長， 総合企画局国際化推進室5人
記 者：1名（京都新聞）
傍聴者：1名
次 第：（1）開会
（2）京都市挨拶（星川副市長）
（3）出席者紹介
（4）座長の選出
（5）多文化施策懇話会について（事務局説明）
（6）福井委員報告
（7）意見交換
（8）次回会議について（事務局説明）
（9）閉会

1 開会

2 京都市挨拶（星川副市長）

3 出席者紹介

（1）委員自己紹介

有 田 委 員：関西国際交流団体協議会の理事を務めており，総務省の国際化関連の仕事にも関わっているほか，京都府アクションプランの策定にも国際化の立場から委員として関わっている。府市連携しての京都の国際化に向けてお役に立ちたい。

片 山 委 員：私は学生時代にアメリカへ1年留学していた。外国からの留学生や観光客の方が過ごしやすい京都について議論していきたい。

河 田 委 員：国際女子留学生センターの館長を務めている。同センターは1967年に左京区修学院に開設した留学生寮である。後継者不足や経済的な課題があり，残念ながら今年度で閉鎖予定だが，これまでの経験を会議での議論に活かしていきたい。

柴 田 委 員：京都市国際交流協会の専務理事と京都市国際交流会館の館長を務めている。この懇話会を通じて，多文化の息づく住みやすいまちづくりについて議論したい。

西 岡 委 員：佛教大学教育学部で教鞭を取っており，京都市男女共同参画センター「ウィングス 京都」の館長も務めている。アメリカに家族と住んでいた際，海外での子育ても経験した。こうした生活者としての実感を大切にして多文化共生について議論したい。

福 井 委 員：以前，東京で営業マンをしていた際，労働組合の活動を通じてアメリカ，旧ソ連，中国と交流することが度々あった。その後京都で向島ニュータウンに住むようになり，30年以上になる。向島での中国帰国者の方々との交流に取り組んでいる。

金 委 員：私は在日コリアン2世である。「東九条 CAN フォーラム」という団体の活動を通じて，高齢化，少子化の進む東九条を，多文化共生のまちとして活性化することを目指している。また，多文化，多国籍の老人福祉施設「故郷の家・京都」に勤めており，高齢化の進む在日コリアン1世や2世に係る福祉活動に取り組んでいる。

オレーナ委員：京都市と姉妹都市であるウクライナのキエフ市出身で、来日して12年になる。京都府国際センターで働いた経験があり、現在は京都大学大学院で日本文学を研究している。京都市国際交流会館で情報提供や相談業務を行っている。

プリマベラ委員：京都大学の大学院生で、京都に来て6年になる。フィリピンの留学生会をはじめ、様々な留学生会と付き合いがある。また、京都府国際センターで相談員をしている。

張 委 員：中国の北京出身で、京都に来て15年になる。兵庫県立大学で客員教員をしているほか、オレーナ委員と同じく京都市国際交流会館で相談業務等に携わっている。

ポンキワラン委員：日本に来て20年になる。日本の高校、大学を卒業し、現在は大阪のNPO法人「チャームヘルプセンター」で医療や健康相談関連の仕事をしている。京都では、伏見青少年活動センターと共催で毎年「健康フェスタ」を実施しているほか、京都YWCA・APTで外国籍市民等を対象としたボランティア活動を行っている。

※ 姜直子委員は欠席（事務局から説明）

（2）京都文教大学挨拶

杉 本 教 授：文化人類学を専門としており、大学では異文化理解教育を行っている。学生たちと一緒に向島地域で多文化共生の催しを行っており、福井委員には平素からお世話になっている。

4 座長の選出

＜出席委員の互選により、西岡委員を座長に選出＞

西 岡 座 長：星川副市長のお話を伺って、この懇話会の重要性を改めて認識した。今後の会議で良い議論が出来るよう、委員、事務局ともに力を合わせていきたい。

5 京都市多文化施策懇話会について説明（事務局説明）

6 福井委員報告

（1）福井委員

○伏見区向島地域について

- ・向島には30数年前にニュータウンがつくられ、外部から多くの人が移り住んできた。一方で以前からの地域住民もおられる。
- ・急激な少子高齢化：二の丸北小学校の生徒数は開校当初600人→いまでは79人
- ・向島駅前まちづくり協議会と京都文教大学、種智院大学、京都すばる高校が協力して地域のお祭り「春の祭典」「秋の祭典」を実施

○中国帰国者について

- ・現在、親族も含めて約1000名の帰国者が向島の市営住宅で生活していると言われている。
 - ・1世の方との交流はあるが、2世、3世の生活実態は良く分からない。
 - ・突然「日本語の話せない日本人」が地域に入ってくるので、対応に苦慮することが多々あった。
- 行政から自治会に事前説明があれば、よりスムーズに受け入れられたのではないと思う。

○中国帰国者の方々との交流

- ・中国では家族の結びつきは強いが、町内会はない。
 - ・当初はゴミの出し方が分からない、花壇に勝手に野菜を植える等のトラブルが多々あった。
- まち美化事務所からゴミ出しの中国語版のチラシをもらい、自治会で配布
- 中国帰国者の方々と自治会との交流会を行ってから、大きなトラブルもなくなった。

- ・公園で太極拳をしているところを見かけて「春の祭典」への参加を依頼。餃子、肉まんなどの模擬店を出してもらう。
- ・「伏見南部ふれあいプラザ」等の催しで京都文教大学と交流
- ・中国帰国者向け日本語教室の取組：地域の愛隣館及び1街区集会所で実施

(2) 京都文教大学 杉本教授

- ・学生たちの発案で、地域及び中国帰国者の方々との交流が始まった。
- ・国籍、文化、世代の違い、障害の有無など様々な「多文化」の共生を考えることが大切
- ・「アジア・アフリカとびっきり映画祭」の取組

→学生たちの発案により、異文化間交流だけでなく、世代間交流をテーマに交流会を実施

- ・伏見の青少年活動センターや向島の留学生センターと協力
- ・ニュータウンは現代の社会問題の縮図であり、一歩先に問題が顕在化するからこそ、取組も一歩進んでいく可能性がある。そこで大学としても協力して、まちづくりに貢献していきたい。

7 意見交換

柴田委員：向島の事例は、学生が「地域に関わりたい」と自主的に取組を始めた点が非常に印象深かった。ニュータウンには、人工的につくられた社会特有の問題が多々ある。昼間働いている現役世代にとっては単なる居住スペースになりがちで、地域交流が希薄であるという問題。それに、子供世代が出て行ってしまうと、急激に高齢化が進むという問題もある。

プリマベラ委員：私自身は、母国の文化、ルーツを大事にして子ども世代に伝えていきたいと思っている。向島の多文化共生の催しに、大学生が参加しているのは、とても良いことだと思う。学生たちは卒業していくので、取組が一過性のものに終わるのか、それとも継続的な活動、支援になるのかが問題だ。

杉本教授：地域の方や留学生にも実行委員会に入ってもらい、地域に根差した多文化共生の活動を進めたいと考えている。また、今年の「アジア・アフリカとびっきり映画祭」では初めて入場料を取るなど、予算面での課題をクリアする工夫をしている。

金委員：向島の取組事例では、自治会の側から中国帰国者の方々に働きかけたという点、そして大学生が取組に参加しているという点が印象に残った。ニュータウンは文字通り新しいまちで、古くから多くのオールドカマーが暮らしてきた歴史のある南区の東九条地域とは対照的である。東九条では、毎年、多文化共生のお祭り「東九条マダン」を開催している。プリマベラ委員のおっしゃった「自分の文化、アイデンティティーを子供たちに伝えたい」という思いから始まった催しである。打楽器等の出し物が中心になることもあって、発足最初は音に関する苦情が地域から絶えなかった。悲しいことに、いまだに当時の行き違いが尾を引いており、自治会との接点がない。こうしたすれ違いを解消するには、当事者同士で話をするより、第三者に入ってもらう方が良い。地域の理解を得て多文化共生の取組を広げていくため、南区の多文化施策懇話会のようなフォーマルな会議があれば良い。

有田委員：向島での取組に参加した学生たちに、その後どのような意識の変化があったのか伺いたい。また、福井委員のように地域との橋渡し役、コーディネーターの役割を担う人材を育てることも課題だと思う。中国帰国者の方のほとんどは高齢者であり、年金を受給できるか否かという問題も大きい。日本語教室の取組も重要だ。

杉本教授：確かに学生は卒業し、大学を離れていくが、向島での活動は学生の進路にも大きな影響を与えている。お祭りの度に福井さんに会いに帰ってくる卒業生が何人もいる。

福井委員：橋渡し役、コーディネーターの後継者育成は大きな課題である。長く自治会で活動している人間が橋渡し役になる方が、行政や地域との話は円滑に進むのだが、一人の人間が長く務めていると後継者が育たない。活動経費の問題も悩ましい。自治会の予算は限られているし、行政からの補助金は、新規事業でないと対象にならないものが多いので、継続的な支援が望めない。中国帰国者の生活に関して言うと、1世の方は支援金を受給できる一方で、配偶者や2世3世は対象にならない。今後、彼らが日本社会でどのように自立して生活していくかが課題である。

張委員：私は向島に住んでいる。地域や大学の方が中国帰国者や外国籍等の方と接したときに、言葉の壁をはじめ、どのような課題があったのか伺いたい。

杉本教授：若い学生たちにとっては、言葉の壁はそれほど大きな障害にならないようだ。むしろ外国籍等の方に対し、子育て等の生活上の問題で助けになれないことに悩む学生が多い。中国帰国者の方々は若い学生のことを、とてもかわいがってくれている。

福井委員：中国帰国者1世の方と生活する上で、言葉の壁は大きい。また、団体生活の経験がないまま高齢になって日本に帰国し、ニュータウンという集合住宅に住んでいるので、生活習慣の違いが非常に大きい。70歳、80歳という年齢で生活習慣を変えるのは難しく、そもそも自治会のルールを理解できないことも多い。しかし言葉や文化は違っても、高齢化、親子関係、障害のある人との関わり合いなど、実生活で感じることで、抱えている課題は日本でも中国でも通じるものがある。先日、中国帰国者の総会に参加したが、人と人とのつながりが一番大切であると改めて感じた。

片山委員：京都市内の様々な多文化共生のイベント等をまとめて一元的に情報発信する取組があると良い。

国際化推進室：まだまだ不十分な面もあるが、国際交流会館を中心に様々な情報を集約してイベント情報等の発信に努めていきたい。

柴田委員：国際交流会館では市内で開催される各種イベント等のチラシ、ポスター等を掲示し、インターネットでの情報提供にも取り組んでいるところである。

西岡座長：本日は初回の会議にもかかわらず、大変活発な議論をしていただいた。ニュータウンにおける、自治会や学生が主体となった多文化共生の取組について報告いただいたが、これは必ずしも特殊な事例ではない。高齢化をはじめ、抱えている課題は日本社会共通のものである。当事者だけで話し合うより、ニュートラルな第三者が入ってもらう方が良い、という指摘も示唆的だ。当事者同士より一つ間を置いた関係者の方がうまくいく、というのは、高齢者と孫世代との関わりがうまくいくのと似ている。また、既存事業を発展させていきたいのに、行政の補助金が増えれば新規事業にしか出ない、という問題提起もあった。中国帰国者の方々と地域で交流の場をもったことをきっかけに、日常生活上の様々なトラブルが解決されたというお話では、改めて交流の重要性を再確認できた。異なる世代間、地域間、文化間と、様々なかたちでの交流の場が存在することが、まちづくりにとって欠かせない要素だと思う。

8 次回会議について（事務局説明）

9 閉会